

令和元年5月27日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01943

研究課題名（和文）産業観光の複合化モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of Models for the Diversification of Industrial Tourism

研究代表者

武田 竜弥（TAKEDA, TATSUYA）

名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：90254127

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ・オーバーハウゼン市とデュースブルク市の観光振興策の比較分析を行い、産業観光地の持続的な発展のためには、産業遺産と他の観光資源を結び付けた複合観光の推進が重要であることを明らかにした。フランスの代表的なワイン産地を調査し、ワインツーリズムを軸とした複合的な観光戦略のモデルを抽出した。特にボルドーについては、1995年に開始された都市の再開発と観光振興の展開を「住みよい町づくり」と「訪れたい町づくり」の対比という視点から分析し評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年わが国でも産業観光が新たな観光の一形態として認知されるようになってきた。しかしその歴史の浅さなどから、これまでは焦点を絞るという形で産業観光の推進が考えられ、たとえ優れた産業観光地であっても、ブームが一巡すると急速に客足が遠のくという事例が少なくなかった。それに対して本研究では、産業観光の先進地であるドイツおよびフランスの事例をもとに、産業観光を他の観光資源と結び付けた複合観光のモデルを提案した。その成果は産業観光のすそ野を広げ、産業観光地の持続的発展に寄与するところが大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）： I analyzed the tourism policy of City Oberhausen by comparison with the neighboring City Duisburg, and clarified that the strategic integration of industrial heritage and the other tourism resources was important for the sustainable development of industrial tourism sites. I researched popular wine regions in France and extracted the models of integrated tourism strategy centering around wine tourism. Especially I analyzed the urban regeneration program of Bordeaux and Bordeaux Metropole since 1995, one of whose essential components was tourism promotion, and evaluated the results from the viewpoints of both inhabitants and visitors.

研究分野：観光学

キーワード：産業観光 複合観光 都市の再開発

1. 研究開始当初の背景

1990年に文化庁が近代化遺産総合調査を開始して以来、わが国でも近代の産業遺産が文化財として認知されるようになった。1996年には文化財保護法に登録文化財制度が導入され、産業遺産の保護を推進する制度的基盤が一層整えられた。こうした動きが1990年代半ば以降、新たな観光振興策と結びつき、産業文化財を観光対象とする産業観光が大きな注目を集めるようになった。2001年には名古屋市内において「産業観光サミット in 愛知・名古屋」が開催され、「産業観光推進宣言」が採択された。この催しは翌年以降「全国産業観光フォーラム」として継承され、2004年の全国産業観光推進協議会の設立へと繋がった。また経済産業省が文化庁とは別に「近代化産業遺産33」(2007年)、「続・近代化産業遺産33」(2009年)の認定を行ったことも、産業遺産の保護と産業観光推進への動きを後押しした。

こうした流れの中、筆者は産業観光の中核施設となる産業博物館に注目した。そして2006年から協力者とともに産業博物館の全国的な調査に着手し、2008年にその成果を編著書『日本全国産業博物館めぐり 地域の感性を伝える場所』として発表した。また2008~10年度には細目「博物館学」で科研費の助成を得、それまで筆者自身によって調査を行えなかった地域の調査を重点的に実施した。これらは全国の産業博物館を対象に、その展示内容、設置形態、運営方法、活動内容等を比較調査するものであり、それによって地域コミュニティの核となり、また地域の情報発信と交流の場となるべき施設のあり方を個々の実態に即して検討することができた。

そしてこの研究から、新たな課題が明確になっていった。それは、産業博物館の活性化のためには、狭義の博物館学だけではなく、観光学からのアプローチも不可欠であるとの認識だった。もともと博物館は、よほど著名な施設でないかぎり単体での集客力に乏しい面がある。しかし産業博物館は一般に他の博物館よりも地域性が高いので、近隣の観光資源と組み合わせることによってその魅力を大きく増すことができる。また観光学の知見は、博物館の展示方法や広報、アクセスなどの面を考える際にも有効である。一方観光学の側から見ても、博物館学の成果は大いに活用する余地がある。特に学びの要素の多い産業観光の場合、博物館の果たす役割は大きい。以上のような考察から、筆者はそれまで進めてきた産業博物館研究の成果を観光学の面から捉え直し、産業博物館を軸とした産業観光のモデル化を考えるようになった。

筆者は2011~14年度に細目「観光学」で科研費の助成を得、博物館学と観光学の共同作業という視点から産業博物館と産業観光の研究を行った。その際特に注目したのが、ドイツのルール地域であった。19世紀以来、ルールはドイツを代表する石炭・鉄鋼の産地としてドイツ重工業の牽引役を務めてきた。しかし1950年代末の石炭危機を境にこの地の産業は急速に衰え、あとには多くの負の遺産がのこされた。この状況を打開するため、地元ノルトライン＝ヴェストファーレン州は1989年から10年をかけてエムシャーパーク国際建築博覧会というプロジェクトを実施した。その成果は目覚ましく、2001年にはルールの中心に位置するツォルフェライン炭鉱遺産群がユネスコの世界遺産に登録され、2010年には同遺産群のあるエッセン市がEUの選定するヨーロッパ文化首都に選ばれた。観光客数も大きく増え、2012年の入込客数は1985年のおよそ3倍となった。この経緯についてはこれまでもわが国で少なからず研究・報告がなされてきたが、その中心は都市再生や環境改善といった面にあり、観光という面からは必ずしも十分に論じられてこなかった。そこで筆者は産業観光の推進という観点からルールの取り組みを調査し、その成果を発表してきた。

この研究を通じて筆者は、産業観光の拠点となる産業博物館の機能について理解を深めるとともに、複合観光という新たな視点を獲得することができた。たしかにルールの産業遺産は世界屈指のものであり、観光の目玉である。しかしルールでは産業観光を単体で考えるのではなく、歴史観光や自然観光、イベント、グルメ、ショッピングなどと組み合わせることで展開しており、それがルールの持続的発展を支えていた。翻ってわが国の産業観光への取り組みを見ると、まさしくこの点が不十分であるように思われた。筆者が居住する愛知県はわが国の産業観光の先進地として知られるが、ここでもほとんどの場合、産業観光は独立して考えられている。産業観光の歴史の浅いわが国では致し方ない面もあるが、今後産業観光のすそ野を広げ、その持続的発展を促すためには、産業観光の複合化こそ喫緊の課題だと考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、ドイツやフランスなど産業観光先進国の事例を調査・分析し、産業観光の複合化モデルを提案することを目的とする。その特色は、次の二点にまとめられる。

第一は、産業観光の深化と多面化である。前項で述べたように、わが国で近代の産業遺産が文化財として認知されるようになったのは、1990年代に入ってからのことである。ゆえに産業観光の歴史も浅く、これまでは焦点を絞るといって形で産業観光の推進がなされてきた。これに対して本研究は、産業観光を外側に開くことを目指す。他の観光資源と有機的に結びついた産業観光の複合化モデルは、今後わが国の産業観光(地)を持続的に発展させるうえで寄与するところが大きいと考えられる。

特色の第二は、海外の事例との比較研究である。わが国の産業観光はいまだ発展途上の段階にあり、海外の事例から学べることが多い。しかし一方で、観光は地域に基づくものであるから、海外の事例から抽象的なモデルを構築してもそのままでは役に立たない。本研究は、広範なフィールドワークの積み重ねによって、具体的な事例に基づいたモデルを提案することを目

指す。

3. 研究の方法

観光とは、観光者が実際に観光地に赴くことによって成り立つ活動である。ゆえに観光学の研究においては、各地域の実情を無視した抽象的な思弁は通用しない。本研究においても最も重視されるのは現地調査（フィールドワーク）であり、目指すべき理論やモデルはその調査結果から帰納的に導かれる。

研究は、国内で入手できる資料やインターネットなどを活用した予備調査（調査地の選定や調査方法の検討などを含む）現地調査、調査結果の分析と新たな資料・文献などによる研究、という三つの段階からなる。調査国は当初ドイツを予定していたが、2011～14年度の科研費研究との比較を考え、フランスに変更した。

4. 研究成果

(1) 産業観光を軸とした複合観光の有効性の実証

2014年度までに行った現地調査の結果とその後の文献研究をもとに、ドイツ・デュースブルク市とオーバーハウゼン市の観光振興策とその成果を比較し、オーバーハウゼン市の成功の鍵が産業観光の複合化にあったことを明らかにした。

1で述べたように、長らく停滞していたドイツ・ルール地域は1989年に開始されたエムシャーパーク国際建築博覧会（以下IBAと略記）を機に大きく変貌し、世界有数の産業遺産観光地として多くの訪問客を集めるようになった。ところが同じルールにありながら、デュースブルクとオーバーハウゼンではかなり状況が異なっていた。デュースブルクはIBAの終了する1999年までルール全域と足並みをそろえて入込客数を伸ばしたが、2000年以降その伸び率が急速に鈍化した。具体的な数字を見ると、1989年から99年までの伸び率が+69%だったのに対して、2003年から13年までの伸び率は+30%に留まった。一方これに対してオーバーハウゼンは、当初こそ伸び悩んだものの、1994年を底として飛躍的に入込客数を伸ばした。2014年の入込客数は1994年のおよそ9倍に及んだ。

宿泊者数の統計を見ても、オーバーハウゼンの伸び率は突出していた。2000年と2014年の延べ宿泊者数を比較すると、デュースブルクやルール全域の伸び率が+40～50%台であったのに対して、オーバーハウゼンの伸び率は+140%を超えていた。オーバーハウゼンはデュースブルクと比べると、面積がおよそ3分の1、人口も4割程度の小さな町にすぎない。にもかかわらず、デュースブルクを上回る宿泊者を集めていた。

デュースブルクはIBAの中で、デュースブルク・ノルト景観公園の整備、内陸港の再開発、ドイツ内陸航行博物館の拡充、という3つの大きなプロジェクトを成功させた。にもかかわらず、IBA終了後入込客数の伸びが鈍化していった背景には、以下の二つの理由があったと考えられる。

その第一は、エッセンを中心とするルール内陸部の吸引力が増したことである。2001年にエッセンとゲルゼンキルヒェンの間にあるツォルフェライン炭鉱遺産群がユネスコの世界文化遺産に登録された。また2010年にはそのエッセンがEUの選定する「ヨーロッパ文化首都」に選ばれた。これらによりルール内陸部への観光客は大きく増したが、反面、通過点に位置するデュースブルクは割を食う形となってしまったのである。

第二は、観光振興に対する危機感の違いである。1960年代以降、ルールの鉄鋼業はライン川沿岸部に集約される形で整理されていった。そのためルール内陸部では石炭業も鉄鋼業もすべてなくなり、産業構造の転換は待たなしの状況に追い込まれた。そうした中で新たな収益の柱として期待されたのが観光だった。ルール内陸部の都市にとって、観光振興はいわば生き残りをかけた戦いだったのである。これに対してデュースブルクでは、鉄鋼業や物流業が基幹産業として生き残った。それ自体は喜ぶべきことであるが、その分観光振興への熱意がルール内陸部に比べていささか弱いというのも事実である。実際現地を訪れてみると、町の規模の割に入込客数が少ないこともあって、閑散とした印象を受ける。たしかに景観公園や旧市街などの拠点はそれなりに賑わっているのだが、点と点が十分に結ばれていないため、町全体としての活気が乏しいのである。今後デュースブルクが観光都市として発展していくには、豊富な観光資源を縦横に結ぶシステム作りが必要であると思われる。

一方、基幹産業がすべて失われたオーバーハウゼンにとって、1980年代はまさに市の存続に関わる危機の時代であった。市の課題は大きく二つあった。一つは荒廃した自然や住環境の改善、もう一つは新たな基幹産業の確立だった。そして後者の核として期待されたのが、観光だった。

オーバーハウゼンの観光の軸は、他のルールの諸都市と同じく産業遺産観光である。かつてはルールでも最大級の工業都市であっただけに、市内には優れた産業遺産が数多くあり、それらを結ぶだけで充実した観光ルートを提供することができる。しかしながらオーバーハウゼンの躍進の理由は決してそれだけではなかった。いくらオーバーハウゼンに優れた産業遺産があるといっても、ルールにはそれに勝るとも劣らない産業遺産があちらこちらに残されているのである。もしオーバーハウゼンの観光振興策が産業遺産観光のみに特化していたとしたら、それらとの差別化ができず、オーバーハウゼンの突出した成功はなかったであろう。

オーバーハウゼンの成功の鍵は、観光の複合化にあった。その象徴的な事業がノイエ・ミッ

テの再開発である。ここはもともと市内最大の製鉄工場の敷地であったため、ガスタンクやペーレンス・ハウスなどの産業遺産も同じエリアにある。またライン＝ヘルネ運河を挟んだ対岸には、アイゼンハイム労働者団地や立坑櫓の残るオルガ庭園（旧オスターフェルト炭鉱）もある。オーバーハウゼンはこのノイエ・ミッテを新たな商業と娯楽の中心とし、同市を代表する産業博物館（旧アルテンベルク亜鉛工場）のある中央駅前からのアクセスを改善することによって、大きな相乗効果を生み出したのである。

オーバーハウゼンの行った観光の複合化とは、いわば二重の意味での差別化戦略だった。いくらノイエ・ミッテの再開発といっても、ショッピングやコンサートだけなら、所詮オーバーハウゼンは大都市の敵ではない。ましてや外国からの観光客ともなれば、わざわざショッピングのみを目的にオーバーハウゼンを訪れる必然性はないのである。

ルールの観光客が増加し続けているのは、ルールにしかないもの、世界的に有名なルールの産業遺産を見たいという人々が増え続けているからに他ならない。オーバーハウゼンは、産業遺産観光を推進することによって世界的に注目を集めるルールの拠点都市としての性格をアピールし、ノイエ・ミッテの再開発によって他のルールの諸都市との差別化を図ったのである。

翻ってわが国の状況を見ると、産業遺産観光はまだまだ単体で考えられているというのが現状である。各自治体や地元観光協会のホームページなどを見ても、産業遺産の紹介はそれだけで独立していることが多い。産業遺産観光の歴史の浅いわが国では致し方ないのかもしれないが、こうしたやり方をしている限り、持続的発展は難しいだろう。

観光地の持続的発展の鍵は、リピーターの確保にある。世界遺産として話題に上れば一度は観光客が増えるであろうが、それだけでは不十分なのである。一度見たけれどもまた見てみたい、一度行ったけれどももう一度行ってみたい、こう思わせる戦略が必要である。そのためには、核となる産業遺産に他の観光資源を有機的に組み合わせることで、地域の魅力を多面的に構成しアピールしていく「観光の複合化」こそが求められる施策であると考えられる。オーバーハウゼンの事例は、そのことを実証している。

(2) 複合観光としてのワインツーリズムの研究

世界の観光大国フランスが近年特に力を入れているワインツーリズムの現況を調査し、ワインツーリズムが単なるグルメ観光ではなく、周到な文化戦略に基づいた複合観光の一形態であることを明らかにした。調査地はフランスの代表的なワイン産地を網羅し、相互の比較を行った。本研究の成果は、近々に論文として発表する予定である。

(3) 都市の再開発と観光振興についての事例研究

前項調査の一環として訪れたボルドーを対象に、都市の再開発と観光振興の展開を「住みよい町づくり」と「訪れたい町づくり」の対比という視点から分析した。特にボルドーを取り上げたのは、この町が近年、世界屈指の観光地として大きな注目を集めるようになったからである。13世紀にワイン産地をして名を上げたボルドーは、18世紀に植民地貿易の拠点港として栄え、20世紀初頭には南西フランスを代表する工業都市となった。しかし第二次世界大戦後、港湾業や造船業など地場産業の衰退とモータリゼーションの進展により市中心部の人口は徐々に減少し、町はかつての活気を失っていった。ワインの名声こそ堅持していたものの、1990年頃のボルドーは、観光地とはほど遠い「暗い街」だった。

そのようなボルドーに変革をもたらしたのが、1995年に市長に就任したアラン・マリー・ジュベだった。そもそもフランスは、わが国と同じく首都への一極集中が顕著な国である。フランスはそれを是正すべく、1980年代から大胆な地方分権政策を推し進めてきた。そうした流れの中、首相も兼任（1997年まで）していたジュベは、トラムの導入、市街地の美化、街並みに配慮した住宅の整備など矢継ぎ早に改革を実施し、ボルドーを今日の姿へとつくり変えていった。その成果が大きな評価を得たのが2007年である。この年ボルドーはユネスコの世界文化遺産に登録され、一躍「観光都市」として注目されるようになった。

第一論文（5 - ）では、1995年から2007年までの改革の歩みを、ボルドー改革の象徴ともいえる歴史地区の再生に焦点を当てて論じた。もともとボルドーの改革は、住民にとっての「住みよい町づくり」から始められたものだった。しかしその成果が上がるにつれ、ボルドーはいつしか観光客にとっての「訪れたい町」ともなっていた。その大きな節目が、2007年の世界遺産登録である。これを機にボルドーへの注目度は一挙に高まり、改革の重心も「住みよい町づくり」から「訪れたい町づくり」へシフトしていった。この時代のボルドーは、いわば「住みよい町づくり」が「訪れたい町づくり」に繋がる循環の過程にあった。

第二論文（5 - ）では、2007年以降「訪れたい町」として認知されるようになったボルドーがいかにして世界有数の観光地へと成熟していったか、複合観光としてのワインツーリズムの発展に注目して論じた。質・量ともに世界最高峰のワイン産地として知られるボルドーであるが、この地で組織立ったワインツーリズムの育成が本格化したのは、2007年の世界遺産登録以降のことだった。折しも2008年、時の大統領ニコラ・サルコジが「フランスの美食術」をユネスコの無形文化遺産に登録申請する方針を示し（2010年登録）、2009年には政府主導の下でワインツーリズム高等評議会が発足、ボルドーと並ぶ著名なワイン産地であるブルゴーニュやシャンパーニュでもユネスコ世界文化遺産への登録を目指す動きが活発化しつつあった（両者とも2015年登録）。こうしたうねりの中、ボルドーのワインツーリズムもまた動き出していっ

た。

ボルドーのワインツーリズムは、市外にあるワイナリーやブドウ畑の見学と市内に建設された世界最大級のワイン博物館「シテ・デュ・ヴァン」(2016年開館)の組み合わせによってその骨格が作られた。生産現場と博物館の組み合わせは産業観光の基本なので、まずは順当な進め方であったといえる。だがボルドーに観光地としての優位性をもたらしたのは、その先の戦略だった。鍵となったのは、ほかならぬワインである。

(1)でも指摘したように、観光地の持続的発展の鍵はリピーターの確保にある。その点、ワインには他の産業にはない強みがあった。たとえば、製鉄業の盛んな都市に「鉄の博物館」を作り、それと工場見学を組み合わせた産業観光を構想するのは容易である。だが余程関心のある人でもない限り、同じ博物館や工場を何度も訪れる人は少ないので、ブームが一巡すると急速に客足が鈍ることになる。これは多くの産業観光地に共通した悩みである。これを解決するため、観光地側では主軸の産業観光に別の観光資源を絡ませ、観光の複合化を図ろうとする。

ワインツーリズムの強みが発揮されるのは、まさにここである。組み合わせられる観光資源が何であれ、そこに飲食がある限り、ワインはどこにでも入り込むことができるのである。鉄の産業観光を温泉と絡ませても、観光客が鉄を消費するようになるわけではない。鉄の産業観光と温泉はあくまで別個のものである。だがワインの場合は違う。たとえ別の観光資源を目当てに訪れた観光客でもワインを飲み、ワインを飲むことがその観光をワインツーリズムの一形態にしてしまうのである。

ボルドーのワインツーリズムは、この強みを最大限に生かして成長していった。ボルドーとその周辺には、歴史的建造物、スポーツ施設、会議場、川、海など、きわめて多くの観光資源がある。この豊かな観光資源がワインと組み合わせられることによって、ワインツーリズムの厚みと広がりが増していったのである。ワインツーリズムには他の産業観光にはない強みがあり、ボルドーには他のワイン産地にはない強みがあったのである。

なお、現在準備中の第三論文では、2016年以降のボルドーの動きを「大きな町づくり」という視点から分析し、ボルドーの今後を展望する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

武田 竜弥、都市の再開発と観光振興 フランス・ボルドーを例に(二)、Trans/Actions、査読無、第3号、2018、pp. 135 175

武田 竜弥、産業文化の旅 第三回 ビールと自動車(ドイツ・シュトゥットガルト市)、Trans/Actions、査読無、第3号、2018、pp. 246 261

<http://id.nii.ac.jp/1476/00006381/>

武田 竜弥、都市の再開発と観光振興 フランス・ボルドーを例に(一)、Trans/Actions、査読無、第2号、2017、pp. 191 225

武田 竜弥、産業文化の旅 第二回 東洋のマチュピチュ(愛媛県新居浜市)、Trans/Actions、査読無、第2号、2017、pp. 269 277

<http://id.nii.ac.jp/1476/00006154/>

武田 竜弥、工業都市から観光都市へ ドイツ・デュースブルク市とオーバーハウゼン市を例に、Trans/Actions、査読無、第1号、2016、pp. 71 98

<http://id.nii.ac.jp/1476/00006382/>

武田 竜弥、産業文化の旅 第一回 日本ワインのふるさと(山梨県甲州市勝沼)、Trans/Actions、査読無、第1号、2016、pp. 170 177

<http://id.nii.ac.jp/1476/00006157/>

〔学会発表〕(計1件)

武田 竜弥、工業都市から観光都市へ ドイツ・オーバーハウゼン市を例に、日本観光学会・総合観光学会 2015年度春季全国学術研究大会、2015年6月27日、日本大学(東京都世田谷区)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。